

# 第1回奈良支部型試合

レポート／西 照之 参段

寒さが厳しい1月の最後の日曜日に、橿原曾我川緑地体育館にて、奈良支部（秦貴典支部長）が主催する、第1回奈良支部型試合を開催した。

第1回ともあつてか、出場人数こそ少なかったが、小学生低学年・高学年から一般までの道場生約40名程が参加し、日頃の稽古の成果を披露した。

空手というと、その醍醐味のひとつに演武で行う『試割り』がある。直接打撃にてトーナメントを競う、実際に相手に拳・蹴りを当て倒す極真空手に於いては『試割り』はもってこいのパフォーマンスであり、人の目を釘付けにし魅了するものであると思う。しかし、その半面、“力”ばかりを前面に出して、単に“強さ”ばかりが先行するのも否めない。

空手を魅せる上では『試割り』は効果が良いかもしれないのだが、それと同じくらいに魅せるモノがあるとすれば『型』である。

それは、単に動いているのではなく、実際に相手をイメージ（意識）し、足の運び・力・手の引き・目の配り等・・・日頃の厳しい稽古を積んでいる者にしか出すことのできない“迫力”・“気迫”があると思う。その“迫力・気迫”は、『型』を初めて見る者に対しても、好印象を与える“力”を持っていると思う。その“力”は『試割り』で行う“力”に勝るとも劣らないモノだと信じて疑わないのである。

『試割り』も簡単ではないが、“力”をつけ、各部位をしっかりと鍛えていれば、ある程度は成功するのではないだろうか？一方で『型』で見る者を魅了するには“力”をつけ、各部位を鍛えるだけではダメなのである。

現在、道場で稽古を積んでいる者には、良くわかるはずである。組手主体の中にあつて、『型』は一步も二歩も後退している感があるが、本来は組手と同じくらいに重要なのである。

さて、『型試合』だが、出場した道場生は皆よく頑張ったと思う。低学年の者も気迫のある動きには良い意味で唸るものがあり、道場での稽古にも身が入ってるなと感じさせられた。

又、高学年（上級者）ともなると動きにメリハリがあり、スピード感もあり力強さが見られた。

私は、主審・副審を務めさせていただいたのだが、組手試合と同じ否それ以上に緊張した。立ち方、バランス、目線、拳の握り方、気合等・・・組手よりも多くの事を採点しなければならず、中途半端な気持ちで務めることは出来ないからだ。

又、主審・副審を務める事で、私自身の型に対する認識や甘さなども改めて考えさせられ、非情に有意義でもあった。

只、今回の一般に関しては2名（中学生1名、高校生1名）のみの出場で少しばかり淋しい感があったのは否めないだろう。

反省すべきはその点である。『型』を軽視（？）していることがそれとはなしに伺えるのである。私を含めた他の黒帯や指導員にも責任はあると思う。又、上に立つ立場の者としてもっと『型』の機能的な動きや原点である人を倒すという目的と意識が型の中に詰まっていると言

う事を何よりも理解しなければならないと思う。

まあ、そんな事を言ってる私自身が一番怪しい気がするのだが…。

秦師範は、主・副審を務める私達に対して『何を根拠にしてその得点を出したのか』と問われた。ご存じのように奈良支部支部長である秦師範は、故大山総裁のも元で内弟子として今に至るまで、30年以上の長きに亘って『空手道』を追求し続けておられる。

その師範との間には当然の如く見解の相違はあるのだが、それでも私たちは“黒帯”であり“先生”“指導員”などと呼ばれているのである。

私が思うに、私を含めた黒帯に対して空手本来の人を倒す技術やその方法が詰まっている型に対する認識の甘さ、そして『空手道』そのものに対する希薄さ、人の前に立ちその人を審判・採点する重要性の欠如に対する問いだとも感じた。

若い黒帯の者たちはどう感じただろうか？」

秦師範は、閉会式における総評で入賞した道場生に日頃の成果をしっかりと出せてよかった事や、高学年ともなってくるとレベル的にも高い意識で挑んだ事に対する称賛に近い心のこもった総評をされていた。

そして、『強くなるとういうのは、人や相手に対してではなくて“自分に負けない”“諦めない”心を養う事』『それ以上に親（父・母）や周りに対する“感謝”の気持ちを決して忘れる事のないように！』とも強調されていた。

単純な話に思われるが、決してそうではない。空手を学び上達する上でとても重要な事である。

型にしろ組手にしろ強い選手を育てるのはとても重要である。しかし、強さや力ばかりが前面に出て“人として大切な事”を学ばずに大きくなることの危うさは、自分自身の価値や築いてきた事を一瞬にして崩してしまうということを言われたのだと思う。

堅苦しく思われるだろうが、閉会式の総評自体は分り易く一人一人の心に届くように言われていた。そして、空手は“術”ではなく“道”であるとも強調されていた。空手術ではなく『空手道』なんだと。

人を倒すことで強さは得られるのかもしれないが、それでは“術”だけである。人は決してついてこない。我々は人間である以上は周りとの調和（融合）も必要である。

厳しい修行（稽古）をすることで、肉体だけでなく精神も鍛え養って行かないといけない。そして、その養い鍛えた心と肉体を以て日々の生活に活かすことが重要だと…だからこそその『道』なんだと言われた。

第1回の型試合に出た道場生が、師範の言われたことを何処まで理解したかは分からないのだが、表情は明るかったように思う。『型』一つするにしても、決してぶれる事のない強い気持ちが必要なんだという事は得られたのではと願いたい。

40名ほどの参加者ではあったが、得ることは多々あった大会であったし、記念すべき大会になったと思う。

午後からの開催とはいえ、厳しい寒さの中貴重な時間、労力をもって会場まで足を運び我が子

を応援してくれたご父兄の皆様、そして分支部長及び黒帯の面々、道場生の皆様大変お疲れ様でした。又、秦師範には日々様々な面で道場生が活躍し自信を得る場と機会を提供して下さる事に感謝します。

第2回型試合には、今回よりも多くの道場生が出場して、今一度空手に於ける『型』の重要性を少しでも理解認識してもらえることを願いつつレポートを終わらせていただきます。